

『新版ルナール』と『アーサー王の死』における運命の女神

高 名 康 文

12 世紀後半から 13 世紀中頃にかけて成立した『狐物語』における同時代文学作品のパロディーは、研究者ばかりではなく、現在使用されているコレージュの教科書によっても指摘されてきたことである⁽¹⁾。この作品群の中で、リュシアン・フーレが、最初に成立した作品と考えた第 II-Va 枝篇の冒頭では、ルナールとイザングランのはなはだしい敵対関係が、武勲詩や古代物語の主人公たちをひきあいにして語られている。またさらに、ルナールとエルサンとイザングランの三角関係は、トリスタン物語におけるそれをモデルに作られたのだということもよく指摘されている⁽²⁾。ここでいうパロディーの効果と、『狐物語』における動物の登場人物のとりて足らない行為を描く際に、ふつうは、武勲詩や騎士道物語における英雄の行為を描く際に使われる文体や表現をあてはめることから生じる齟齬による、というのが、筆者がこの研究をはじめて以来の考えである⁽³⁾。

本論では、13 世紀前半にフランスに成立した散文『アーサー王の死』と、同世紀後半に『狐物語』の後継作として成立した『新版ルナール』に現れる運命女神に着目して、前者が後者に影響を与えているのではないかという仮説を提示する。そのためにまず、アーサー王伝説と『狐物語』の関係について、先行研究が述べていることを整理した上で、『新版ルナール』に特に影響を与えたと考えられる『狐物語』第 XI 枝篇が『アーサー王の死』のパロディーとなっていることを指摘する。その上で、『新版ルナール』と『アーサー王の死』に登場する運命女神を、同時代の俗語文学に登場するこの女神の描かれ方も考慮しつつ比較して、前者は後者を下敷きにしていないかということをも指摘する。さらに、前者が後者と間テクスト性を有しているとして、作者は、それにより何を言おうとしているのか、それはパロディーといえるかということを検討する。以下で述べるように、『狐物語』に

においてアーサー王の物語のパロディーがあったことは、よく論じられてきた。しかし、そのような間テキスト性が後継作にまで及ぶかどうかということについての先行研究はないように思われる。

1. 『狐物語』とアーサー王物語

『狐物語』では、第 I 枝篇とその続編 (Ia, Ib) および、第 XI 枝篇と第 XVII 枝篇に (これらの枝篇は、以上の順に成立したと考えられている)、アーサー王物語のパロディーと思われる箇所がよく見られる。とりわけ指摘されてきたのが第 Ib 枝篇である。ノーブル王の軍隊に追われて生死不明であるという設定のルナールが、旅芸人に化けて故郷に舞い戻るといというのがこの枝篇の内容である。イザングランに対してルナールは、自分は、ブルターニュのレーヤ、メルラン、アーサー王、トリスタンとすいかずらの話しを知っていると述べるが⁽⁴⁾、これが『トリスタン佯狂』のパロディーになっていることは明白だろう。

また、第 I 枝篇と第 Ia 枝篇において、ルナールの息子の一人はペルスエと呼ばれている⁽⁵⁾。生け垣 (haie) を突き抜ける (percier) とは、農村部におけるこの動物の生態をよく言い表しているわけだが、これが、ペルスヴァルの名前のもじりであることは言うまでもない。

また、ルナールと、王妃フィエールの関係に注意を払うことは大切である。第 I 枝篇の最終部でルナールは、いったんは死刑を宣告されるが、妻エルムリースの嘆願のおかげで王に赦されて巡礼に出る。その際、王妃はルナールに指輪を与える。この作品の続編である第 Ia 枝篇においては、ノーブル王の軍隊に包囲されたルナールが、ある晩、王のテントに忍び込んで、王妃を強

姦した後、捕らえられる。この時王妃は、かつてルナールに指輪を与えることにより、人の恨みを買うことになったと反省したというくだりがある。それにも関わらず、王妃はルナールのいところであるグランベールに隠れて会い、ルナールへと御守りを託す⁽⁶⁾。第I枝篇以前から、ルナールと関係を持っていたことを想定するのでなければ、彼女の心理と行動は理解することができない。ルナールはランスロとも重なってくるというわけである。

2. 『狐物語』第XI枝篇「皇帝ルナール」における『アーサー王の死』のパロディー

ルナールと王妃との関係は、『狐物語』の中では中期以降に書かれたとされている第XI、第XVII枝篇においても反復される。これらの中でも、第XI枝篇は特に興味深いものである。というのも、この作品の後半は、ノーブル王の二回の戦争——一つは異教徒に対するもの、もう一つはルナールに対するもの——を描いているからである。

駱駝に率いられた異教徒の軍隊が自国に侵攻してくると、ノーブル王は自ら軍を率いてこれを迎え撃とうとするが、この際にルナールを摂政に任命する。王が発案すると、妻エルムリースを亡くしたばかりという設定になっているルナールは、王妃と宮廷に留まる。テキストには彼も王妃も喜んでいた⁽⁷⁾とある。

異教徒との戦いは王の勝利に終わるが、この間にルナールはノーブル王からの書状を偽造して、使者を使って自らの宮廷に届けさせる。ここには、自分が亡き後はルナールを王妃と結婚させるという、王の「最後の意志」が書かれているが、彼はそれをみなに伝える。それを聞いた王妃は、躊躇わずこ

れを承諾する。

王妃はこれを聞くと、みなの前で答えました。「美しい殿よ、あの人〔＝
ノーブル王〕がそうお命じなのですから 私は命じられていることをしな
くてはなりません。他にどうしようもないのですから。(RenβXXL,
v. 21227-21231)

王が軍を率いて帰ってくると、ルナールは開門することを拒否する。戦争が、
裏切り者と裏切られた者の間で始まる。

ロジェ・ベロンが指摘しているように、『狐物語』第XI枝篇の筋は、『アー
サー王の死』で、アーサー王がランスロと戦う間に、留守を任されたモルド
レが、王を裏切って王妃グニエールと結婚をしようとするエピソードを思
い起こさせる⁽⁸⁾。ルナールとフィエールの関係は、モルドレとグニエールの
のそれに重ね合わせることが可能だ。ただし、以下のような違いがある。

すなわち、両作品の王妃たちは、王に反旗を翻した摂政に対して正反対の
態度をとる。フィエールがルナールの愛を喜んで受け入れるのに対して、グ
ニエールはモルドレの愛を拒絶してロンドン塔に閉じこもる。また、フィ
エールは、ノーブル王が帰還しても何の反応も示さないでルナールを助ける。
ベロンも述べているように、あたかも、彼女はノーブル王の妻であったこと
を忘れてしまったかのようだ⁽⁹⁾。

ルナールは軍馬にまたがります。王妃に別れを告げてルナールは言いま
す。「私が思うところ、王は囚われ人となってまた嫌な思いをすることに
なしましょうぞ。」「王妃は」言います。「神の賛同あれ。あなたの言うこ

とが本当になりますように。」去り際に彼は彼女に口づけをします。

(*RenβXXL*, v. 21574-21581)

王が戻ってきて戦いが始まろうという時にグニエーヴルが、モルドレとの関係については無実であるのにも関わらず、たとえ王が勝っても、モルドレを相手に自分が貞潔を守れたとは信じてもらえないだろうと心配をして修道院に入って世を捨てたこと（『アーサー王の死』の169, 170節）と、フィエールの態度は対照的である。こうして比較をすると、『狐物語』第XI枝篇のテキストは、ジャン・フラピエが強調したような『アーサー王の死』におけるこのエピソードに見られる運命の劇的要素⁽¹⁰⁾を排除することによって、女性の節操のなさを強調していると見ることができる。

以上に、『狐物語』第XI枝篇は、『アーサー王の死』のパロディーとして読めることを指摘した。ここで、お断りしておかなければならないことがある。この議論には、作品の成立推定年代上の問題がある。というのは、『狐物語』の各枝篇の成立年を、1914年刊行の博士論文で推測したリュシアン・フーレが第XI枝篇の成立年代を12世紀の終わりとしているからだ⁽¹¹⁾。『アーサー王の死』成立の推定年代は1230年だが、これよりも30年ほど前ということになる。フーレによる『狐物語』各枝篇の年代測定には、すでに30年も前から研究者たちから疑問の声があがっているが⁽¹²⁾、それに代わる説も提出されていない。

しかし、フーレの議論を検討してみると、第XI枝篇に関しては、テキストにおいて史実との関わりから年代測定が可能になるような箇所は一切指摘されていない。フーレは、「ルナールの葬送」を描いた第XVII枝篇に第XI枝篇のルナールとフィエールの結婚についての言及があることから、それより

も早いと推測している。フーレは第 XVII 枝篇の成立を 1205 年頃としているが、それは、この枝篇に描かれている狐の葬送が、教会の壁に彫られていることに言及した 1220 年頃の説教があることを根拠に、作品で書かれたことが壁に彫られ、説教で言及されるにはこれぐらいかかるだろうということから導き出されている⁽¹³⁾。しかし、現代に生きる我々は、その後の美術史の分野の研究成果により、モデナ大聖堂の狐の告解、死に真似、葬送の彫刻は、『狐物語』ではなく、『フィシオログス』に想を得たもので、12 世紀初頭にはできていたであろうことを知っている⁽¹⁴⁾。そうすれば、フーレによる推定年代の最終年 (terminus ad quem) の根拠は突き崩されてしまう。上にあげた論文でベロンは、第 XI 枝篇の成立年代をもっと後にずらすことを提案しているが、筆者には正当であるように思われる。

3. 『アーサー王の死』、『狐物語』第 XI 枝篇、『新版ルナール』の間テキスト性

以上に、『狐物語』の第 I, Ia, Ib, XI 枝篇には、アーサー王物語の影響が強く見られるということを指摘した。次に、『新版ルナール』に話題を進めることにする。この作品の末尾に記されていることによれば、これは、1281 年にリールにおいて、ジャクマル・ジェレという人物によって完成されたということである⁽¹⁵⁾。この作品は、『狐物語』の上に述べた作品の中でも、特に第 XI 枝篇からの影響を大きくうけているものと考えられる。すなわち、I, Ia, Ib, XI 枝篇において形成されてきた王妃とルナールの関係が再現されており、また、特に第 XI 枝篇で活躍しているルナールの息子たちが重要な役割を担っている。さらに、本論ではここに注目したいのだが、『新版ルナール』の第二部には、ルナールとノブロン王の戦いが描かれていて、ルナールが実質的に

勝利を収めた後、運命の車輪の頂点に立つルナールというモチーフが現れている。ルセル版の 6498 行以下の粗筋を紹介する⁽¹⁶⁾。

戦いの趨勢が決まった後、ルナールは圧倒的に優位であるのにも関わらず、王と和解をする。再び、王の臣下となるが、ルナールは、その抜け目のなさに評判が広まり、世界中の王公、高位聖職者に招かれて熱烈に歓迎される。かくして、ルナールの詐術的なふるまい「ルナルディー (renardie)」が世界に君臨するようになる。『狐物語』第 XI 枝篇と同様に、ルナールは王と戦いをする。また、実際には王にはならないものの、詐術によって世界に君臨するという意味で戴冠をする。写本には運命の車輪を題材にした細密画が描かれているが、そこでのルナールは冠を戴いている（本論末の図版参照）。すなわち、戦いと戴冠という『狐物語』第 XI 枝篇の根幹をなす二要素が、『新版ルナール』にもある、ということである。

次に、『新版ルナール』において、ルナールが世界に君臨するに至る過程を紹介する。その上で、ここにおける運命の車輪のモチーフを、『アーサー王の死』におけるそれとの関係性により読む可能性について論じたい。ルナールと王が休戦協定を結んだ際、それまで、ルナール軍の船である「悪徳の船」の操船を担当していたドミニコ会修道士たちと、フランシスコ会修道士たちは、恩賞としてルナールに援助を求める。ルナールは、息子のうちルナルデルを前者に、ルセルを後者に与え、彼らはそれぞれの修道会の管区長になる。さらに、世界中の聖俗の権威者がルナールを求めて争う。特に、アッカにいるテンプル騎士修道会と、ヨハネ騎士聖堂会が熱心で、どちらに行くかは、ローマ教皇に委ねられる。その間に、エルサレム総大司教の求めには、スデュイアンを与えることで応えるが、語り手によると、これは、エルサンとルナールの間にできた不義の子ということである。ルナールは最終的に、半

分がテンプル騎士団。半分がヨハネ騎士団の制服を着て、両方の騎士修道会に入ることにする。

運命女神が儀仗馬に乗って登場するのは、この場面でのことである。ルナールに、車輪の頂上に登るように促すが、ルナールはこれを拒否する。そこに座った場合、もし女神が車輪をまわせば、真逆さまに落ちてしまうからというわけである。彼女は応えて言う。「今のところ、車輪が私によって回されることは決してないでしょう。」と。自分が支えているからお登りなさいというわけである。

「今のところ、車輪が私によって一回転とて回されることはないでしょう。あなたは「誠実」を打ち破りました。「忠実」は私の足もとにいます。いつになろうと、再び立ち上がることはないでしょう。「欺瞞」が彼を倒したからです。ルナール殿、あなたの力により、「傲慢」は「謙虚」を私の足もとに倒して赤っ恥をかかせました。「謙虚」は本物の「誠実」のために狼狽していたのですが、ルナール、あなたが「誠実」を倒したからです。〔車輪に〕登りなさい、ルナール、あなたの右には「傲慢」が座し、あなたの左には驢馬のフォーヴァンに乗った「悪巧み夫人」が座します。あなたのいとこである「欺瞞」は、あなたの伯父である「不正」の息子ですが、〔「不正」は〕「ごまかし」夫人に彼を産ませたのです。私は「欺瞞」を車輪に登させます。この者について示しておく、皆を殺すために手に鎌を持っています。これにより、この世の「正義」を追放するのです。曲がり歪んだ鎌のように「忠実」はこの世で死んでしまいました。いつになろうと、再び立ち上がることはないでしょう。」
(RenNouvR, v. 7692-7715)

運命女神が言うに、ルナールは「誠実」(Foi)を打ち破り、彼女の足もとには「欺瞞」(Fausseté)が倒した「忠実」(Loyauté)が転がっているということである。彼女は、他の寓意人物にルナールの脇を固めさせるからと言ってルナールを説得する。「傲慢」(Orgueil)が彼の右に、「悪巧み夫人」(Guile)が左にそれぞれ座す。運命女神は「欺瞞」(Fausseté)を、同様に車輪の上部に登らせる。莊嚴のルナール、アンチキリストとして君臨する、というわけである。L写本(BnF fr. 1581)の末にはこの場面が細密画で描かれている(本論末の図版参照)。

それでは、『狐物語』第XI枝篇と『新版ルナール』を『アーサー王の死』と比較してみよう。第XI枝篇においてルナールは、『アーサー王の死』のモルドレと同様に王に反旗を翻して王位につく。とはいえ、最終的には破れて、モルドレとは異なって王と和解する。一方、『新版ルナール』においてルナールは、まず王と和解をして、その後その偽善の力により、象徴的な戴冠を果たす。その時、運命女神が現れるが、これは、ローマ人たちを倒したばかりのアーサー王の身に起きたことと同様である。すなわち、アーサーも『新版ルナール』のルナールも、この世における栄達の絶頂に達した瞬間に、運命女神に出会っているということになる。『アーサー王の死』のこの有名な場面をみてみよう。

眠りにつくと、一人の婦人が彼の前に現れたように思われた。かれがこの世で見た誰よりも美しく、彼を持ちあげて、かつて見た中で一番高い山に運んでいった。そこで、彼を車輪の上に座らせた。この車輪には、座があって、一つがもちあがるともう一つが沈むという具合になっていた。王は、自分は車輪のどの位置に座しているかに注意したが、自分の

座が一番高いところにあることを知る。婦人は彼に尋ねていた。「アーサー、あなたはどこにいますか?」「婦人よ、高い車輪に乗っているけれど、これが何であるかはわからない。」と王。「それは運命の車輪ですよ。」と彼女。さらに、彼に尋ねます。「アーサー、何が見えますか?」「婦人よ、私には世界中が見えるように思える。」「ほんとうに、世界中が見えています。これまでは、あなたがその主でないようなものは、たいしてありませんでした。あなたに見えている四方八方で、あなたはかつて存在した中で最強の王でした。でも、この世での傲慢というのは、どんな者も、世界の権力の座から落ちないというほどに高いところに座っていることはない、というようになっています。」そして、彼をつかんで、ひどく地面につき押したので、落ちた時、アーサー王は、自分が完全に碎けてしまい、体と四肢からあらゆる力を失ってしまったように思いました。(MortArtuF², § 176, l. 56-79)⁽¹⁷⁾

『狐物語』第XI枝篇を『アーサー王の死』のパロディーであるというには、推定成立年代の問題があるというのは先に述べた通りである。しかし、『アーサー王の死』よりも、確実に後で作成されたと考えられている『新版ルナール』の作者が、運命女神とルナールの息子たちを作品に登場させた時に、この作品を意識していなかったと考えることは難しいのではないだろうか。

というのは、13世紀において、運命女神の出てくる作品は、有名なものだけでも、『薔薇物語』後篇における「理性」のディスクールや演劇『葉陰の劇』がある。しかし、俗語作品の中で運命女神と登場人物の間に会話が成立している例は、14世紀初頭の『フォヴェール物語』を待たないと⁽¹⁸⁾、本論に取り上げたものの他にないように思われるのである⁽¹⁹⁾。ジャン・ド・マンも、

そのディスクリールの根底にあるポエティウスも、「理性」や「哲学夫人」に運命について語らせているが、運命女神自身に口を開かせるということはない⁽²⁰⁾。実際に運命女神が場面に登場する演劇『葉陰の劇』においても、妖精モルグが、「生まれた時から哑で聾で盲だ」⁽²¹⁾と言うように、女神は無言のまま車輪を回している。ところが、『アーサー王の死』と『新版ルナール』では、短いながら、運命女神が主人公たちに話しかけている。また、両方の物語の主人公はこの世での栄達を極めているのだが、『アーサー王の死』の運命女神が、どのような者も権力の座から落ちないということはないと言ってアーサー王を突き落とすのに対して、『新版ルナール』の運命女神が車輪を支えておくから、頂上にお乗りなさいと述べていることは、鮮明な対比をなしている。

『狐物語』の第I, Ia, Ib, XI 枝篇が、アーサー王物語と間テキスト性を示していること、さらに、『新版ルナール』の作者が、その間テキスト性から生まれた王妃とルナールの関係、ルナールと王の戦いといった要素を作品に持ち込んでいることは上に見た通りである。ここで付け加えていえば、『新版ルナール』を収める写本のうち、F写本（BnF fr. 1593 写本）とV写本（BnF fr. 25566 写本）は、両方ともアーサー王文学であるユオン・ド・メリーの『反キリストの騎馬試合』⁽²²⁾を含んでおり、アーサー王物語をよく知る人たちによって受容されていたことが想定できる。『新版ルナール』には、その成り立ちから、アーサー王物語群と結び付けられる磁場のようなものがあるように思われる。

では、以上に指摘した『アーサー王の死』と『新版ルナール』の間テキスト性からは、どのようなメッセージを読み取ることができるだろうか？

先行研究においては、『新版ルナール』におけるルナールの象徴的な戴冠に、同時代のフランドル社会についての風刺を見ることに意見の一致がみられる。このことは、『新版ルナール』と同様に『狐物語』の後継作品である

『ルナールの戴冠』についても同様だ。13世紀後半のフランドルは、女伯マルグリットの二度の結婚に起因する後継者を巡っての紛争により、政治的に多いに混乱した状態にあった。さらに、都市経済の急速な発展に由来する社会不安がこれに付け加わる。このことについては、ジョン・ヘインズの研究が詳しく論じている⁽²³⁾。この時代の人々にとって、ルナールの戴冠とは、反キリストの到来に他ならないものだっただろう。『新版ルナール』の最終部で、あらゆる美德を打ち負かして悪と偽善の象徴となったルナールが聖俗のあらゆる政治権力の中に入り込むことは上に見た通りだが、それがかつて世俗の王であったアーサーよりも長くこの世に君臨するであろうことが嘆かれているのである。

しかし、運命女神が、ルナールにその車輪について言ったことを思い出そう。「今のところ、車輪が私によって回されることは決してないでしょう。」とあったが、「今のところ」という留保をつけていることに注目しよう。この留保により、ジャクマル・ジェレは、こう言いたかったのではないだろうか？「今日、人々は美德を捨てて、ルナールを喜んで受け入れている。もし、彼らが再び神の道を歩き始めるのであれば、反キリストのルナールは決してその王座から去ることはないだろう。アーサー王ですら、その栄光の頂点から突き落とした運命女神は、ルナールを突き落とすためには何もしてくれない。人は、運命の偶然に頼るのではなく、神への信仰に頼るべきである。実際に、V写本は、そのような戒告で締めくくられている。

だから、私たちの考えを運命女神には賢明に向けておかなければならない。頂上に座っている時に車輪がまわらないようにするために。というのも、忠実な心のままでいる者は落ちることも、道を逸れることもない

のだから。(RenNouvR, v. 7784-7789)

どうやら、『アーサー王の死』の影響は、『狐物語』第XI枝篇を介して『新版ルナール』にも伝わっているらしい。では、『新版ルナール』が『アーサー王の死』の話す運命女神を取り込んでいることは、『狐物語』第XI枝篇と同様に『アーサー王の死』のパロディーとみなせるだろうか？ 誰も永遠に運命の車輪の頂上にとどまらせはしないということにおいて、二つの作品における運命女神の性質には異なるところがない以上、そこには価値の逆転はなく、例えば比較以上の関係性を見出すことは難しい。このことには、テキストとの無償の戯れに興ずる『狐物語』と、社会諷刺をその趣旨とする『狐物語』後継作との性質の違いが顕著に現れているように考えられる。

まとめ

本論において筆者は、『狐物語』第XI枝篇「皇帝ルナール」と『新版ルナール』の類似点を指摘して、『新版ルナール』における運命女神のエピソードが、『アーサー王の死』との関連で読めるという読みを提案した。アーサー王物語の『狐物語』への影響は、『狐物語』とは違う精神で書かれていると言われている『新版ルナール』にもみられるということである。

さらに、本論では、登場人物に話しかける運命女神の描かれ方が13世紀の俗語文学においては特異であったらしいことが浮かび上がってきた。このことは、『新版ルナール』と14世紀の作品で、主人公と運命女神の間に長大な対話を含む『フォヴェール物語』の影響関係を考える際にも重要であるように考えられる。本文の最後に示した、上位テキストの性質により下位テクス

トとの関係が異なってくるという問題と同様に、稿を改めて論じたい。

(本論文は、平成 29、30 年度成城大学特別研究助成『『狐物語』と 13 世紀の『狐物語』模倣作、『フォーベル物語』における女性の表象』の成果報告である。)



(BnF fr. 1581, folio 57r°, BnF Gallica より)

注

- (1) 高名康文「フランスのコレージュ教科書と中世文学—『狐物語』の学習によるジャンル概念の形成—」、成城大学文芸学部紀要『成城文藝』221 (2012)、p. 134 (25)–116 (43)。
- (2) W. A. Tregenza, 'The relation of the oldest branch of the *Roman de Renart* to the Tristan poems', in *Modern language review*, 19 (1924), p. 301–305; Nancy Freeman Regalado, 'Tristan and Renart: two tricksters', in *L'Esprit créateur*, 16 (1976), p. 30–38, etc.
- (3) Yasufumi Takana, «La Parodie dans le *Roman de Renart*—Une étude de la parodie renardienne des romans d'amour des XII^e et XIII^e siècles dans une perspective comparative et diachronique», 『福岡大学人文論叢』31 卷 2 号 (p. 1271–1286)、3 号 (p. 2017–2030)、4 号 (p. 2881–2910)、32 卷 1 号 (p. 391–410)、1999–2000 年；高名康文「『パレルモのギヨーム』と『狐物語』—ジャンルのパロディーについての—考察」、成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻紀要『ヨーロッパ文化研究』33 (2014)、p. 201–248, etc.
- (4) *Roman de Renart*, éd. Mario Roques, 6 vol., Paris: Champion, 1948–1960, v.2435–38. 以後、この校訂本からの引用の際には、*RenR* と略す。
- (5) *RenR*, v.1604 et v.1973.
- (6) *RenR*, v.1829–2014.
- (7) *Le Roman de Renart. Branche XX et dernière: Renart empereur*, éd. Félix Lecoy, Paris: Champion, 1999, v. 20858 sq. 以下、この校訂本からの引用の際には、*RenβXXL* と略す。
- (8) Roger Bellon, «“Renart empereur” (*Le Roman de Renart*, ms. H, branche XVI): une réécriture renardienne de *La Mort le roi Artu* ?», *Cahiers de recherches médiévales et humanistes*, 15 (2008), p. 3–17.
- (9) *Ibid.*, p. 14.
- (10) Jean Frappier, *Étude sur la Mort le roi Artu: roman du XIII^e siècle*, Genève: Droz–Paris: Minard, 1961, p. 258–288 (ch. 4 «La roue de Fortune»).
- (11) Lucien Foulet, *Le Roman de Renard*, Paris: Champion, 1914, p. 100–119.
- (12) J. R. Scheidegger, *Le Roman de Renart ou le texte de la dérision*, Genève: Droz, 1989, p. 23–61.
- (13) L. Foulet, *op. cit.*, p. 103.
- (14) 尾形希和子「イタリアロマネスクの動物誌 第5回 狐」、日本イタリア京都館

- 『コレンテ』 32 (2012), p. 4-6.
- (15) Jacquemart Gielee, *Renart le Nouvel*, éd. Henri Roussel, Paris: Picard, 1961, v. 7735 et v. 7752-7754. 以下では、引用の際にこの校訂本を *RenNouvR* と略す。
- (16) 『新版ルナール』の第二部の要約を、拙稿「ルナールと托鉢修道会：リュトプフ、『ルナールの戴冠』、『新版ルナール』」、西洋中世学会『西洋中世研究』 8 (2016), p. 174-193 (p. 188) に掲載している。
- (17) *La Mort le roi Artu*, éd. Jean Frappier, Genève: Droz-Paris: Minard, 1954.
- (18) *Le Roman de Fauvel*, édition, traduction et présentation par Armand Strubel, Paris: Librairie générale française, 2012. この作品の第二部はフォーヴェルが運命の女神に求愛し、手ひどく拒絶をされる様が描かれている。この問題については、稿を改めて論じなければならない。
- (19) Howard R. Patch, “Fortuna in old French literature”, *Smith College Studies in Modern Languages*, 4 (4) (July, 1923), p. 1-45; Id., *The Goddess Fortuna in Medieval Literature*, London: Frank Cass, 1967 (ハワード・ロリン・パッチ『中世文学における運命の女神』、黒瀬保監訳、三省堂、1993); “Fortune and Woman in Medieval Literature”, éd. Catherine Attwood, *Nottingham French Studies*, 38 (2), p. 1-183; *La Fortune: thèmes, représentations, discours*, éd. Yasmina Foehr-Janssens et Emmanuelle Métry, Genève: Droz, 2003 を参照。
- (20) Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, éd. Félix Lecoy, 3 vol., Paris: Champion, 1965-1970, v. 4807-4930 (ギヨーム・ド・ロリス／ジャン・ド・マン『薔薇物語』篠田勝英訳、2巻、ちくま文庫、2007、上巻 p. 210-214)；ボエチウス「哲学の慰め」渡辺義雄訳、『アウグスティヌス ボエティウス』、筑摩書房(世界古典文学全集)、1966, p. 363-378 (第二巻)。後者の第二巻－散文二 (前掲書、p. 365 sq.) では、哲学夫人が運命女神ならこう言うだろうとして、後者の言葉を語っている。
- (21) Adam de la Halle, *Le Jeu de la feuillée*, texte établi et traduit, introduction, notes, bibliographie, chronologie et index par Jean Dufournet, Paris: Flammarion, 1989, v. 771 sq.
- (22) *Li Tornoiemenz Antecrit von Huon de Méry*, neu herausgegeben von Georg Wimmer, Marburg: Elwert, 1888 (ユオン・ド・メリー「反キリストの騎馬試合」篠田勝英訳、松原・天沢・原野編訳『フランス中世文学名作選』、白水社、1993, p. 233-296)。
- (23) John Haines, *Satire in the Songs of Renart le Nouvel*, Genève: Droz, 2010, p. 111-149.